

4. 水害と治水事業の沿革

4 - 1 . 既往洪水の概要

(1) 遠賀川の洪水の原因

遠賀川流域の年間降水量は約 2,100mm であり、洪水は 6 月～7 月上旬にかけての梅雨前線によるものが多く、大規模な洪水はほとんど梅雨期に発生している。

なお、降雨は長時間降り続くものもあれば短時間に終わるものもありまちまちであるが、近年の洪水については局地的集中豪雨により発生しているものが多く、平成 13 年 6 月、平成 15 年 7 月の洪水では、基準地点日の出橋観測所他数観測所で観測史上最高水位を相次いで記録・更新し、甚大な被害が頻発している。

(2) 洪水の歴史

遠賀川で明治以前の史実に残る一番古い洪水は元和 6 年（1620 年）「遠賀川洪水（水巻町誌）」とある。さらに、元和 6 年（1620 年）から明治 22 年（1889 年）に至る 270 年間に約 70 回の洪水記録がある。明治以降についても度々洪水が発生し、特に明治 22 年 7 月の洪水は福岡県議会史（上巻）水害報告に「遠賀川は流域甚だ延長ならざるも、平時水勢急なるに因り、また非常の激昂をなし其の災害筑後川に次ぐ」と記されており、その規模の大きさは想像に絶するものである。明治 38 年 7 月、昭和 10 年 6 月、昭和 16 年 6 月の大洪水を経て、昭和 28 年 6 月には、古今未曾有と称される程の大洪水が発生し、流域内の死傷者 231 人（死者 20 人）、浸水戸数 38,791 戸に達する悲惨な大災害であった。

その後、昭和 54 年 6 月、昭和 55 年 8 月、平成 13 年 6 月洪水等を経て、基準地点日の出橋で既往最高水位を記録した平成 15 年 7 月洪水が発生した。

(3) 主要洪水の概要

1) 昭和 28 年 6 月洪水

25 日より九州全般に降り出した雨は、梅雨前線の北上とともに発達して、25 日午後より九州中部、北部に強くなってきた。その後、前線は停滞し、25 日夕刻より豪雨があり、26 日 9 時、直方では 201mm に達した。

さらに 25 日夜半より 26 日にかけて 2 時間雨量 80mm を記録し、遠賀川は急激に水位が上昇した。27 日 9 時には降り止んだが、28 日 5 時頃また降り始め、連続雨量 571.2mm を記録した。

日の出橋では、26 日 10 時頃最高水位 5.33m を記録し、その後、植木堤防が決壊した。決壊後、水位はいったん急速に下降したが、降雨とともに再び上昇し始め、28 日 21 時頃 5.40m に達した。植木堤防の決壊がなければ、もっと高い水位を記録したものと推定される。

川島、中間でもそれぞれ 5.30m、4.44m と高い水位を記録した。

植木堤防は 26 日 10 時 50 分に決壊を始め、11 時 30 分頃には 30m、最終的には破堤延長 180m に達した。

この破堤によって遠賀郡中間町、遠賀村の平坦地は一面泥海となり、その惨状は目を覆うばかりであった。彦山川、中元寺川、犬鳴川、笹尾川においても、計 8 ヶ所が決壊している。

○ 被害状況

死 傷 者	231 人	(内死者 20 人)
浸 水 戸 数	38,791 戸	
被 害 田 畑	14,377 町歩	(内流失、埋没 126 町歩)
土 木 施 設 被 害 額	826,362 千円	(36 年換算 11 億 9 千万円)
鉄 道 被 害 額	23,568 千円	(36 年換算 3 千万円)
鉱 業 被 害 額	790,546 千円	(36 年換算 11 億 4 千万円)
商 工 業 被 害 額	386,621 千円	(36 年換算 5 億 6 千万円)
そ の 他 被 害 額	2,448,115 千円	(36 年換算 35 億 3 千万円)
被 害 総 額	4,488,881 千円	(36 年換算 64 億 5 千万円)

泥海の遠賀平野

ヘリコプターも活動



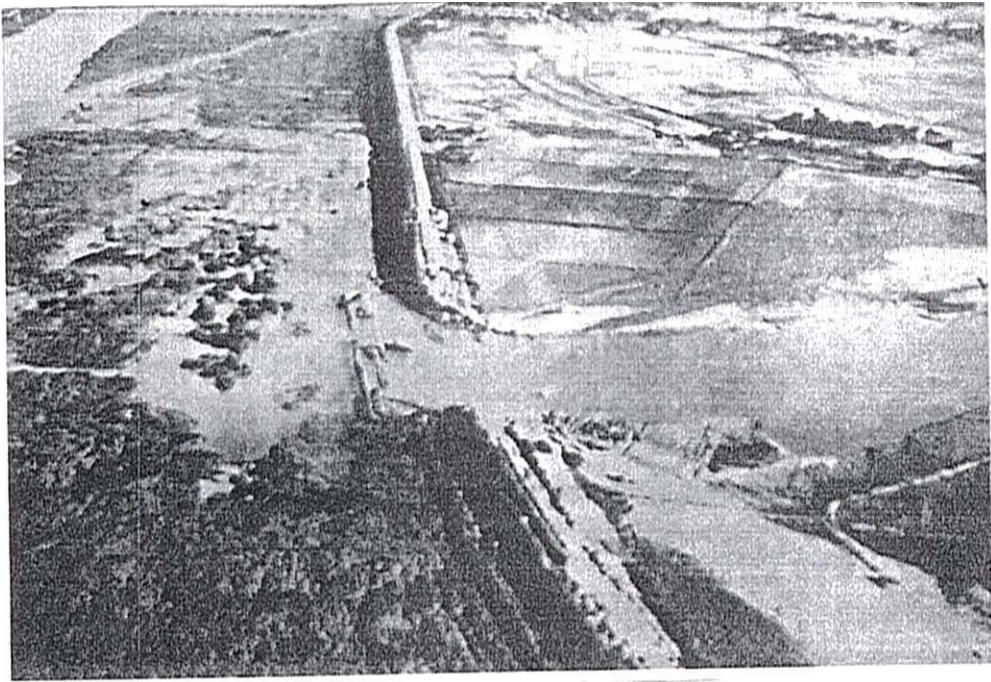
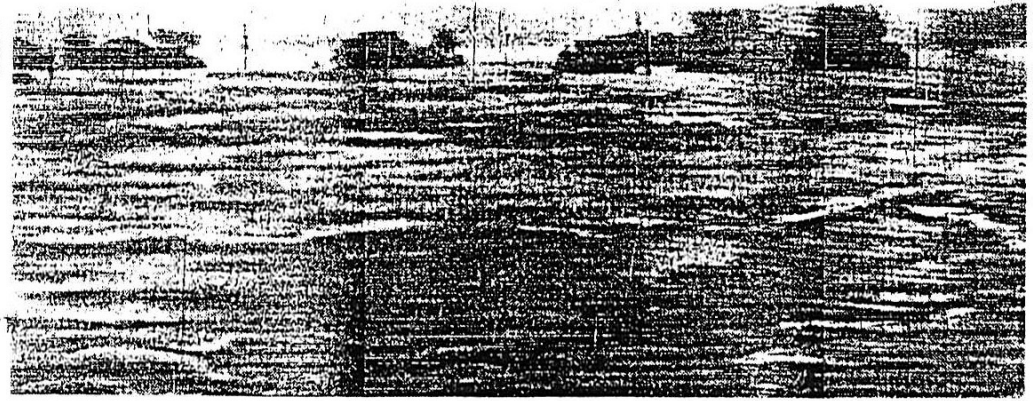
【本紙】北九州の遠賀平野。この地域は、相模川と利根川の合流地であり、かつては豊かな農地であった。しかし、昭和28年6月の大雨により、この地域は泥海に覆われ、多くの家屋が流された。現在、この地域は泥海に覆われ、多くの家屋が流された。ヘリコプターも活動している。

【本紙】北九州の遠賀平野。この地域は、相模川と利根川の合流地であり、かつては豊かな農地であった。しかし、昭和28年6月の大雨により、この地域は泥海に覆われ、多くの家屋が流された。現在、この地域は泥海に覆われ、多くの家屋が流された。ヘリコプターも活動している。

【本紙】北九州の遠賀平野。この地域は、相模川と利根川の合流地であり、かつては豊かな農地であった。しかし、昭和28年6月の大雨により、この地域は泥海に覆われ、多くの家屋が流された。現在、この地域は泥海に覆われ、多くの家屋が流された。ヘリコプターも活動している。

【本紙】北九州の遠賀平野。この地域は、相模川と利根川の合流地であり、かつては豊かな農地であった。しかし、昭和28年6月の大雨により、この地域は泥海に覆われ、多くの家屋が流された。現在、この地域は泥海に覆われ、多くの家屋が流された。ヘリコプターも活動している。

決壊した遠賀川



2) 昭和 54 年 6 月洪水

朝鮮半島にあった梅雨前線が低気圧の刺激を受け、九州北部に南下し雨を降らせた。九州南部まで南下した梅雨前線は再び北上して九州北部に停滞し、前線上を低気圧が通過したため活発化し、強い雨を降らせた。採銅所観測所では時間雨量 57.0mm、日雨量 261.0mm、総雨量 731.0mm を記録した。

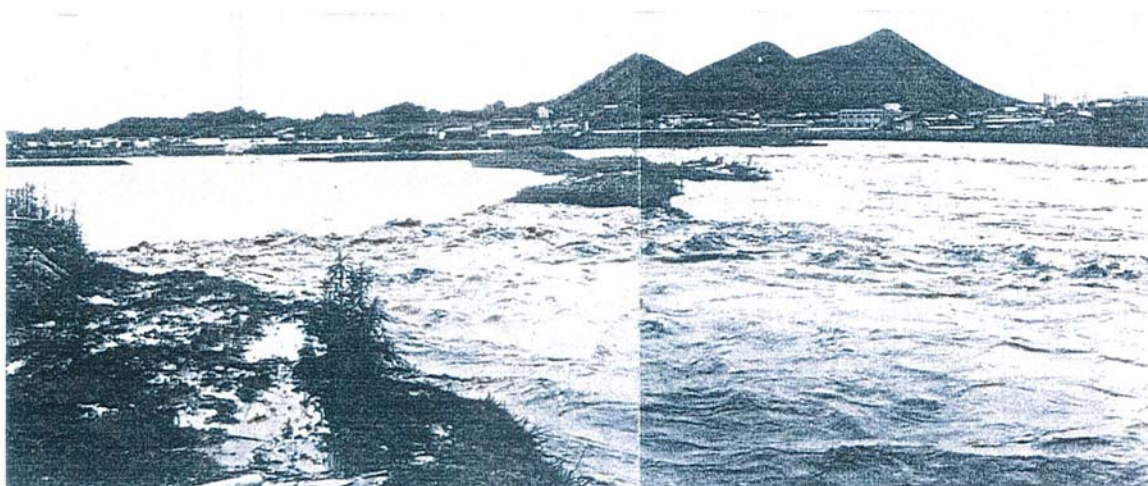
各観測所とも警戒水位を突破した。特に遠賀川本川筋の観測所では警戒水位を 1.00m 以上越えており、日の出橋では 7.40m、中間は 5.33m の最高水位を記録した。

遠賀川流域で死者 1 人、負傷者 8 人、家屋の全壊 7 戸、半壊 94 戸、床上浸水 1,901 戸、床下浸水 4,262 戸、田畑の冠水 4,138ha の被害が発生した。

金辺川右岸（田川市五徳地区）が 95m 破堤した他、遠賀川本川右岸 10k188～10k325 付近で漏水が発生する等、各地で被害が発生した。



川端川湛水区域



金辺川左岸堤防（香春町）

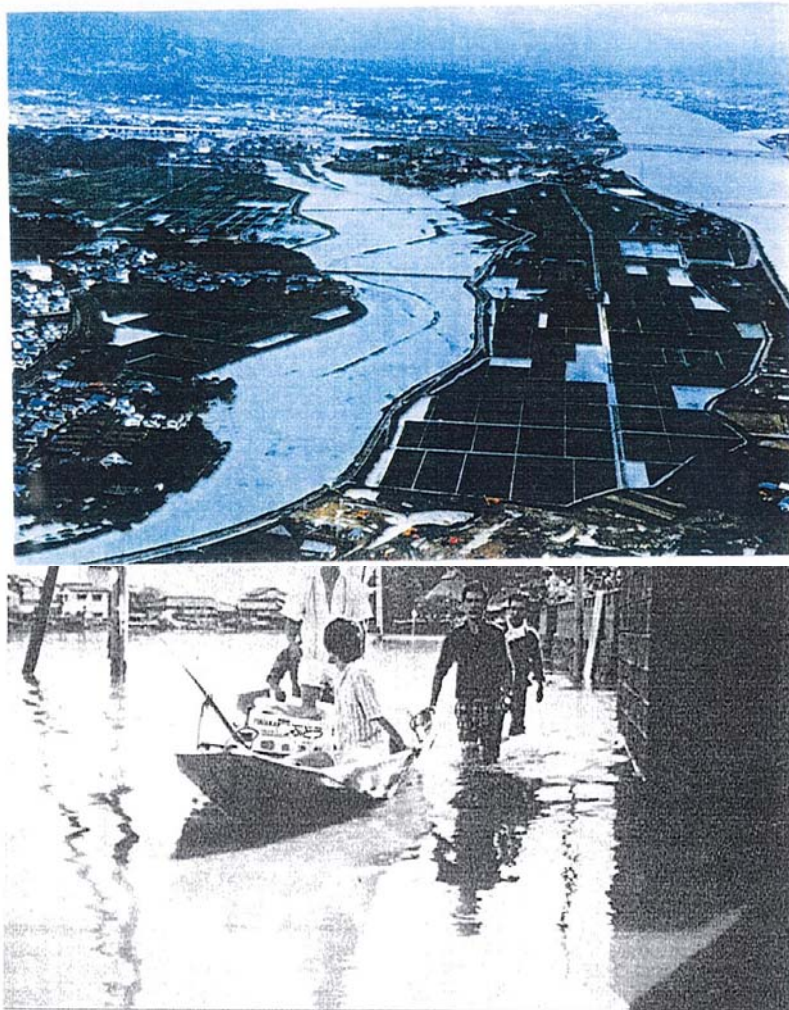
3) 昭和 55 年 8 月洪水

梅雨前線が九州北部地方に停滞し、28 日夜半から活動を活発化させたため各地に強い雨が降った。桑野観測所では時間雨量 56.0mm、日雨量 195.0mm、総雨量 469.0mm を記録した。

川島で警戒水位を突破したのをはじめ、各地で警戒水位を突破した。この出水で唐熊 7.06m、伊田 4.63m、赤池 5.85m の既往最高水位を記録した。

遠賀川流域での被害は、死者 4 人、負傷者 2 人、家屋の全壊 15 戸、半壊 4 戸、床上浸水 331 戸、床下浸水 1,916 戸、田畑の冠水 662ha に及んだ。

犬鳴川右岸 8k000～8k170 附近で 200m ほど表法が崩壊した他、堤防の欠損が 177 ヶ所に及んだ。



4) 昭和 60 年 6 月洪水

対馬海峡の梅雨前線がゆっくりと南下し、九州北部沿岸に停滞して各地で大雨を降らせた。その後、九州中部まで南下した梅雨前線は再び北上し、大雨を降らせ、大隈観測所では時間雨量 53.0mm、日雨量 194.0mm、総雨量 475.0mm を記録した。

川島では警戒水位を突破（最高水位 4.65m）したのをはじめ、各観測所とも次々と警戒水位を突破した。降雨の小康状態に伴い全観測所で警戒水位を一旦下回ったが、28 日 1 時～5 時にかけて再度警戒水位を突破した。

25 日～26 日での被害は死者 1 人、負傷者 1 人、家屋の全壊 3 戸、半壊 39 戸、床上浸水 83 戸、床下浸水 578 戸、田畑の冠水 1,143ha に及んだ。

5) 平成 3 年 6 月洪水

対馬海峡に停滞した梅雨前線により九州北部に大雨を降らせ、流域内の雨量は、時間雨量 20～60mm、総雨量 70～200mm を記録した。

この雨により、本川の日の出橋（最高水位 6.55m）と川島（最高水位 4.63m）で警戒水位を上回った。

直方市では家屋の床上浸水 6 戸、床下浸水 40 戸、道路損壊 7 ヶ所、山（崖）崩れ 1 ヶ所の被害が発生した。

6) 平成 7 年 7 月洪水

梅雨前線は対馬海峡附近まで北上し活動が活発になり、前線上を低気圧が通過した頃、一時激しい雨となった。

遠賀川流域では、2 日昼頃から強い雨が降り、時間雨量 34～69mm、総雨量 273～379mm を記録した。

このため、本川の日の出橋（最高水位 6.90m）、勘六橋（最高水位 5.91m）、彦山川の中島（最高水位 5.99m）他で警戒水位を上回った。

この洪水により、遠賀川流域では床上浸水 40 戸、床下浸水 369 戸、田畑の冠水 1,389.4ha の被害が発生した。

7) 平成 11 年 6 月洪水

6 月 29 日早朝、梅雨前線は九州北部まで北上し活動を活発化させ、九州北部に局地的な大雨をもたらした。

遠賀川流域では、宮田観測所で時間雨量 92mm、山口観測所で 66mm、直方観測所で 70mm など、主に本川中流と犬鳴川において局地的大雨となった。

このため、犬鳴川の宮田橋では最高水位が 6.35m となり既往最高水位を記録した。

この洪水により、遠賀川流域では床上浸水 232 戸、床下浸水 930 戸、農地冠水 752ha の被害が発生した。

8)平成 13 年 6 月洪水

18 日午後、朝鮮半島南部に停滞していた梅雨前線に向かって、南海上から暖かく湿った空気（暖湿気）が流れ込み、大気が不安定となった。

19 日早朝には、さらに暖湿気の流入が強まり、遠賀川流域では夕方から夜にかけて局地的な激しい雨が降った。

彦山川上流の添田では、19 日 23 時までの 6 時間に 221mm の大雨となったのをはじめ、アメダス観測所 18 ヶ所中 10 ヶ所で 19 日の日雨量が 200mm を超えるものとなった。

このため、計 11 箇所の水位観測所で警戒水位を突破し、日の出橋においては危険水位を突破し、最高水位 7.84m を記録した。

これは、戦後最大の昭和 28 年 6 月洪水を上回り、計画高水位まであと 60cm とせまるものであった。

この洪水により、遠賀川流域では床上浸水 87 戸、床下浸水 151 戸の被害が発生した。



遠賀川基準地点日の出橋
ピーク水位状況（20 日午後 2 時）



飯塚市新立岩地区浸水状況

9) 平成 15 年 7 月洪水

18 日午後、対馬海峡附近に停滞していた梅雨前線に向って南から湿った空気が流れ込み、大気の状態が不安定となった。

その後も東シナ海で発達した雨雲が次々と北部九州に流れ込み、雷を伴った激しい雨が降り、筑豊地方でも、19 日 3 時に飯塚で 1937 年の気象観測開始以来第 1 位となる 1 時間に 80mm の猛烈な雨を記録した。

今回の雨の特徴は、福岡県太宰府市から北九州小倉南区へかけての帯状の範囲のみに雨雲が流れ込み、筑豊地方では飯塚観測所（気象庁）において、およそ 7 月の 1 ヶ月間の雨量が 6 時間で降った点があげられる。

これにより、遠賀川の支川穂波川の秋松橋において 19 日 6 時にピーク水位 6.84m（既往最高水位）となり、計画高水位を約 40cm 上回った。

また、代表観測所である川島において 19 日 6 時 50 分にピーク水位 5.92m、日の出橋において 19 日 8 時 20 分にピーク水位 8.07m となり、いずれも、平成 13 年 6 月 19 日～20 日出水時に記録した既往水位を遥かに超えた。

この洪水により福岡県全域で以下の被害が発生した。

この洪水により、遠賀川流域では負傷者 2 名、家屋全壊 7 戸、家屋半壊 9 戸、床上浸水 1,957 戸、床下浸水 1,778 戸の被害が発生した。



飯塚市吉原地区浸水状況

4-2. 治水事業の沿革

(1) 明治 38 年以前の治水事業

遠賀川の体系的治水事業は、慶長 5 年(1600 年)黒田長政の筑前入国に始まり、以来、小竹町南良津より河口までの浚渫や築堤、遠賀川と洞海湾を結ぶ放水路(堀川)の掘削が行われた。

放水路(堀川)の開削は約 200 年に及ぶ歳月を費やして文化元年(1804 年)に完成し、明治以降は富国強兵、殖産興業のもとで石炭運搬路として重要な役割を果たしてきた。

(2) 明治 39 年～大正 8 年の治水事業

第 1 期改修工事

明治に入ると石炭産業の発展とそれに伴う鉄道の開通によって洪水被害は甚大なものとなり、頻発する水害から石炭産業を保護する機運が盛り上がってきた。

このような状況の中、明治 38 年 7 月の大洪水を契機とし、国直轄事業として第 1 期改修工事に着手した。

この第 1 期改修工事は、計画高水流量を本川の下流部(中島橋)で $4,140\text{m}^3/\text{s}$ として堤防の補強、流心の整正、その他舟運の便を図ることを主目的として実施され、14 年後の大正 8 年に竣工した。

その後は、福岡県が維持管理にあたった。

(3) 昭和 20 年～昭和 48 年の治水事業

第 2 期改修工事他

昭和年代になると石炭産業がもたらした鉱害(地盤沈下)が次第に遠賀川にも現れるようになり、河川の荒廃が目立ってきた。このような状況で発生した昭和 16 年 6 月の豪雨は流域の家屋、高知、炭鉱等に激甚な被害を与えた。

終戦後、国土復興、民生の安定が叫ばれ、昭和 20 年、遠賀川は再び直轄改修河川として第 2 期改修工事が開始された。当初は第 1 期改修工事竣工箇所の補修が主であったが、鉱害による遠賀川の激しい荒廃は補修程度では及びもつかず、昭和 23 年度に至って本格的な改修工事が進められるようになった。

昭和 24 年度に基準地点日の出橋の計画高水流量を $3,700\text{m}^3/\text{s}$ 、河口の計画高水流量を $4,200\text{m}^3/\text{s}$ とする計画が決定され、鉱害によって沈下した堤防の嵩上げ、狭窄部の拡幅などを主な目的として改修工事が実施された。

その後昭和 28 年 6 月洪水によって遠賀川は破堤し、甚大な被害を受け、これを契機に昭和 28 年度以降総体計画が決定された。更に昭和 33 年度に修正総体計画、昭和 38 年度総体計画が決定されたが、計画高水流量は昭和 24 年度の計画時の流量がそのまま踏襲された。

(4) 昭和 49 年以降の治水事業 工事実施基本計画策定

昭和 40 年の新河川法施行に伴い、昭和 41 年には従来の計画を踏襲する工事実施基本計画を策定した。しかしながら、都市化の進展と、流域の開発及びこの地域特有の鉱害復旧による堤内地の整備等に伴う流出量の増加が無視できないものとなり、昭和 49 年に計画規模を年超過確率 1/150 として、基本地点日の出橋における計画高水流量を $4,800\text{m}^3/\text{s}$ 、河口部芦屋橋において $6,000\text{m}^3/\text{s}$ とする工事実施基本計画に改訂し、飯塚市、直方市、田川市等の主要地区及び筑豊平野の穀倉地帯を洪水から防御することを最大の課題として、堤防の築造・拡幅及び河道掘削、並びに花の木堰、岡森堰、高柳堰等の改築、さらに曲川、藤野川、鯉田、学頭、川端等のポンプ場の新設工事を実施した。

その後、昭和 63 年 3 月に計画横断形、堤防高に関する部分改定を行い現在に至っている。

遠賀川 計画高水流量図(工実本文記載)

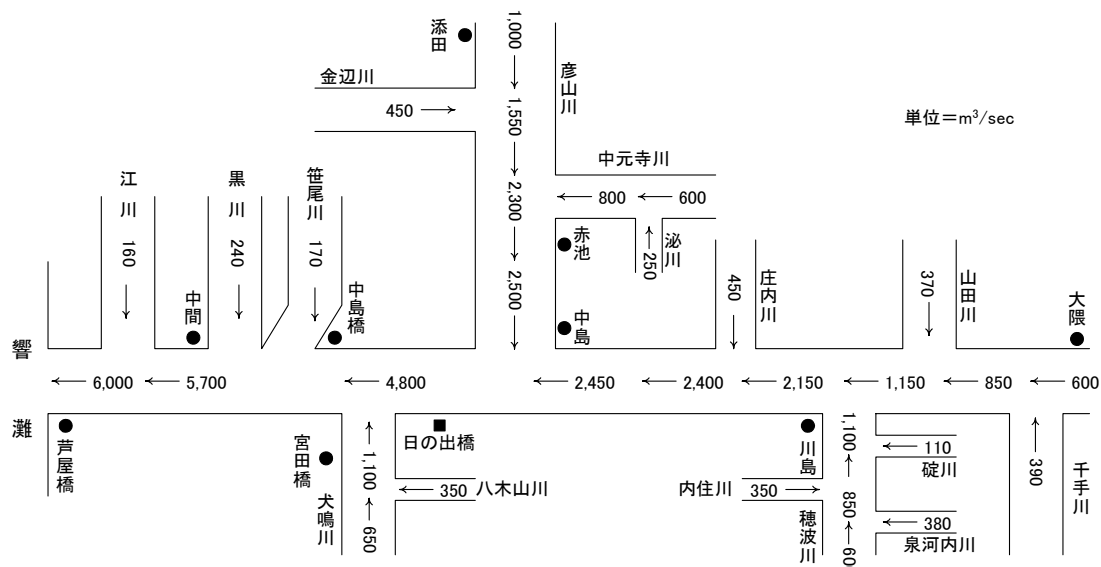


図 4-2 遠賀川現計画高水流量配分図